

津波をくぐりぬけた聖書

奨励	石川 立 [いしかわ・りつ]
奨励者紹介	同志社大学神学部教授
研究テーマ	聖書の神学的・哲学的解釈、解釈学、教父学

見よ、万軍の主なる神は  
 斧をもって、枝を切り落とされる。  
 そびえ立つ木も切り倒され、高い木も倒される。  
 主は森の茂みを鉄の斧で断ち  
 レバノンの大木を切り倒される。

エッセイの株からひとつの芽が萌えいで  
 その根からひとつの若枝が育ち その上に主の霊がとどまる。  
 知恵と識別の霊  
 思慮と勇気の霊  
 主を知り、畏れ敬う霊。  
 彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。  
 目に見えるところによって裁きを行わず  
 耳にするとところによって弁護することはない。  
 弱い人のために正当な裁きを行い  
 この地の貧しい人を公平に弁護する。  
 その口の鞭をもって地を打ち  
 唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる。  
 正義をその腰の帯とし  
 真実をその身に帯びる。

(エレミヤ書 八章九——一節)

しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。『わたしは去って行くが、また、あなたがたのところへ戻って来る』と言ったのをあなたがたは聞いた。わたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くのを喜んでくれるはずだ。父はわたしよりも偉大な方だからである。事が起こったときに、あなたがたが信じるようにと、今、その事の起こる前に話しておく。

(イザヤ書 一〇章三三節——一章五節)

アドベントのすこし方

アドベントの第二週目に入りました。皆さんは、どのようなアドベントを過ごしておられるでしょうか。こんなふうに尋ねられると、皆さんは戸惑われるかもしれません。「えっ、クリスマスは、どのように過ごすか、いろいろ計画しているんですけど、アドベントは別に考えていないです」—たいていの人は、こんなふうに答えるでしょうね。普通はそうです。クリスマスには、あんなことしようとか、こんな過ごし方をしようとか、関心はあるでしょうが、アドベントって、興味が無い、というか、意識しないというのが普通だろうと思います。教会に行っている人も、「クリスマスを前にして、四本のろうそくを、一週ごとに一本一本灯していく期間」というくらいにしか考えていないのではないのでしょうか。

しかし、アドベントも大事なキリスト教の行事です。では、一体どういう期間なのか。もちろん、クリスマスの準備をするわけですが、この期間には、どのような意義があるのでしょうか。

アドベントというのは、とにかく、ひたすら「待つ」ときです。私たちの光であり希望である幼子がお生まれになるのを、じっくりと待ち望むのがアドベント。「待つ」ということがアドベントの意義です。

しかし人は概して、特に最近の人は待つのが苦手です。待つのは退屈なので、皆さんなら、つい、携帯を見てしまうでしょう。でも、バスや電車を待っているときのように携帯ばかり見てクリスマスを待つのは、あまりに残念です。

このアドベントの期間、ときには、クリスマスについて、あれこれと考えたり、いろいろ黙想したりしてみたいかでしょうか。今朝は、いろいろあるイメージのなかで、アドベントにこんなイメージを黙想したらどうだろうか、という一つの提案をしたいと思います。

大津波にもかかわらず残ったもの

「マツ」と言いましたが、「マツ」と言うと、「希望の一本松」のことは皆さんご存じだろうと思います。

陸前高田市は、三月十一日の大地震とそのあとの大津波によって壊滅的な被害を受けました。津波の被害を最も被った町の一つだろうと思います。町全体が一挙に海にのみこまれてしまいました。津波が去ったあとの陸前高田の映像を見ますと、まるで、戦争のあとのように、本当に何も残っていない。一切合財、波にさらわれてしまいました。

ここには日本百景にも選ばれた高田松原という約七万本もの松林があったのですが、これも、ごっそり持っていかれました。七万本ですよ。想像もできません。津波のすこさが計られます。この松原は、一六六七（寛文七）年に地元の豪商が大きな波を防ぐために約六千本の松を植えたのが始まりだと言われています。三五〇年近くもの歴史を誇っていたのです。一—そういう松原ですが、本当にあっけなく消えてしまった。

「あとかたもなく」消えたかという、しかし、そうではありませんでした。どういふわけでしょうか、約七万本のうち、一本だけが、大津波の圧倒的な猛威に耐え、残りました。

この残った一本の松が「希望の松」と言われています。地元の人たちは、いや、地元の人たちだけではなく、日本中の人たちが、一本だけ残ったこの松に不屈の精神を感じ、この松を復興のシンボルと見なしています。

大地震「にもかかわらず」、大津波「にもかかわらず」、町全体が波にさらわれてしまった「にもかかわらず」、七万本の松が流された「にもかかわらず」この松だけは「希望の木」として、すくくと立っていました。

ただ、地震のために地盤が沈下し、この松の根が潮水に浸かっているような状況で、もう腐ってしまっており、保存は無理だと言われています。接ぎ木や挿し木という形でなんとかこの木の命を後世につないでいきたいと保存会は考えているようです。

結局、立ち枯れしてしまう松の木ではありますが、私たちに、希望とか、奇跡というものを垣間見せてくれました。希望というのは、また、奇跡というのは、「にもかかわらず」の出来事であることを改めて教えてくれました。どれほどに壊滅的な状況でも、どのように絶望的な事態に陥ろうとも、「にもかかわらず」の力は働くのだということを知らせてくれたように思います。

このアドベントの、クリスマス「待つ」とき、私たちは、この一本松をイメージし、黙想し、「にもかかわらず」の希望と光の姿を、しっかり心の中に刻んでみてはどうでしょうか。

イザヤ書から—エッセイの切り株から若芽が

先ほど読んでいただいた聖書の箇所は、イザヤ書一〇章三三節から一章五節までですが、この箇所には陸前高田の一本松と同じような情景が描かれています。

一章一節の区切りのいいところから、ではなく、一〇章のほうから読んでいただいたのは、一〇章と一章を連続して読まないで描かれたイメージが鮮明にならないからです。

一〇章三三節、「見よ、万軍の主なる神は／斧をもって、枝を切り落とされる。／そびえ立つ木も切り倒され、高い木も倒される」。三四節、「主は森の茂みを鉄の斧で断ち／レバノンの大木を切り倒される」。

この情景は、外敵であるアッシリアが南ユダ国の都エルサレムに迫り来たときに、神がアッシリアという大木を次々に切り倒した様子を表していると言われています。実際には南ユダ国が都に迫るアッシリアと戦ったわけですが、一〇章の三三、三四節の描き方は、南ユダ国も無傷ではなく、なんとか都は守ったものの、町はすっかり荒れ果ててしまったようにも読めます。実際の歴史ではどうだったのかはともかく、この部分を読みますと、町のなかには敵も味方もみんな切り倒されてしまっている無残な情景が浮かんできます。

「にもかかわらず」。大きな打撃を受け、このような状況からはもはや復興は望めない、と思われた―「にもかかわらず」、一章一節に進んで、「エッセイの切り株（ここは「切り株」としたほうがいいです）」だけは命を保っていた。そして、そこから小さな若い芽が出てきた、というのです。エッセイというのは、ダビデのお父さん。その切り株から出てきた若い芽というのは、イスラエルを救う新しい王のことで。キリスト教は、この箇所をキリストの預言だと解釈しています。

預言であるかどうかはともかくとして、このイメージ―荒廃しきった地にある切り株から若い芽がめがんでいるイメージ―これは、幼子イエス誕生のイメージと重なります。現代のクリスマスはみんなで楽しく幼子の誕生をお祝いしますが、聖書で描かれたイエスの誕生は、状況から導き出された必然ではなく、状況「にもかかわらず」という、状況にまったく反した事柄でした。状況から見て、希望はない、復興はない―そう思われていた暗い時代に、「にもかかわらず」イエスは希望の光として誕生したのです。

「焦土と化した町のなか、絶望的な状況のなかで、にもかかわらず、エッセイの切り株から、小さな若い芽がめがく―このイメージを、イエスの誕生を祝うときを前にして、このアドベントの期間、繰り返し、しっかりと、心に刻もうではありませんか。

### 津波をくぐり抜けた聖書

陸前高田の「希望の松」と同じように、津波に流されず、奇跡的に残ったものが、陸前高田の隣町大船渡にもありました。それはケセン語訳聖書です。

ケセン語訳聖書とは、大船渡に住むカトリック信者のお医者さん、山浦玄(はるつく) 嗣さんが三十年にわたる研鑽をもとに、二〇〇二年から二〇〇四年にかけて出版された新約聖書の四つの福音書のことで。山浦さんは、福音書をギリシア語原典から気仙地方の言葉に翻訳して、イー・ビックスという出版社から出版されました。

イー・ビックス社はケセン語訳聖書をすでに一万〇〇〇部販売し、残りの三〇〇〇部を、ほかの書籍と一緒に倉庫に保管していました。そこへ、3・11、大震災と大津波が来ました。

海から一キロほど離れたイー・ビックス社は社屋を失いました。周りの建物も波に持っていかれました。社長さん（熊谷雅也さんとおっしゃいます）と社員の皆さんはかろうじて津波を逃れました。混乱が少し落ち着いたころ、社長さんが社屋があったところに行ってみると、社屋は跡かたもありません。社屋の近くの倉庫は、建物は残ってはいました。でも、大津波によって使い物にならない状態でした。中を見ると、書籍は大津波の潮水を受けていました。社長さんは「潮水をかぶって、もう売り物にならない」とあきらめました。しかし、ケセン語訳聖書は、しっかりした箱に入っていましたし、それが積み重ねられて包装され保管されていたので、案外、きれいなままで残ったものも多かったのです。

大津波「にもかかわらず」、それをくぐりぬけて残った聖書―これは、荒廃した町のなかで残ったエッセイの切り株とイメージが重なります。

この聖書のことは、五月二十二日、NHKのEテレ「こころの時代～宗教・人生～」という番組で紹介されたこともあって、「大津波に耐えた聖書」、「津波をくぐり抜けた聖書」、イー・ビックス社の言い方です「大津波の洗礼を受けた聖書」として、新聞各紙で報じられ、注文が殺到しました。そして、夏までにはほぼ完売したとのこと。被害にあった、「にもかかわらず」、かえって売れる、という結果になりました。イー・ビックス社にとって、「大津波の洗礼を受けた聖書」は、絶望的な状況のなかの希望のもとになったのです。

ちなみに、私も、この「大津波をくぐり抜けた聖書」―四つの福音書を購入しました。（これはそのうちの一冊です）。

### 津波をくぐり抜けた聖書から芽が出る

潮水をかぶった本が完売するという、この思いがけない展開に勇気づけられて、イー・ビックス社は十月にまたまた山浦さんの新しい訳の聖書を出版しました。今度はケセン語訳ではなく、幕末の各地の話し言葉で福音書を訳したものです。題して『ガリラヤのイエシュア』。イー・ビックス社はもともと大船渡印刷という印刷屋さんで、出版業は後発なのですが、津波で印刷機械がなくなってしまうので、この聖書は、印刷はほかの印刷所に頼んで作られました。

私はこの聖書が出版されたことを知りませんでした。山浦さんと熊谷社長が送ってくださいました。郵送されてきたこの本を見て私は驚きました。そして、「ああ、津波の被害から立ち直って、仕事を始められたのだな」と、とてもうれしい気持ちになりました。この聖書が、津波で荒れ果ててしまった町に咲いた一輪の色彩やかな小さな野の花のような気がしました。この聖書は荒廃した土地にさわやかに咲いています。ここに、復興の希望、光の一端が見えるような気がします。

津波をくぐり抜けた聖書が、イザヤ書でいう「エッセイの切り株」に当たります。そこから出た若い芽がこの本『ガリラヤのイエシュア』です。

どちらの聖書にも、津波「にもかかわらず」、大被害「にもかかわらず」、という「にもかかわらず」の力があふれています。復興の光と希望が見えます。

### まとめ「にもかかわらず」

幼子イエスは、整った条件のもと、周りの状況の支えのなかで生まれたわけではありませんでした。「状況がいいから、生まれる」、「周りがいいので、希望がある」という生まれ方をしたわけではありませんでした。むしろ、逆で、状況は最悪、「にもかかわらず」生まれる、絶望的な状況、「にもかかわらず」希望がある、という生まれ方をしました。

私たちは、こう考えるのが普通です。「状況がこうだから、こうだ」、「周りがこうだからこうだ」、「今までこうだったから、こうだ」、「壊滅したから、希望はない」。

しかし、本当の希望は「にもかかわらず」という逆説のなかにあるのではないのでしょうか。光は、周りが暗くて光を望めないうきこそ、「にもかかわらず」輝きを増します。イエスの誕生も、まさに「にもかかわらず」という力の誕生にほかなりませんでした。

このアドベントの期間、「にもかかわらず」の力と希望と光に思いをはせながら、クリスマスを待ちたいものだと思います。